

ふるさと、風

第80号 (2013年1月)

風に吹かれて (58)

白井啓治

「初茜に風が唄った 感動と怒りは表裏一体と」

本気に怒りを持って振り返らなければ、涙する感動は生まれなしいし、得ることも出来ない。若い頃からそんな思いを強く持って歩いて来たのだったが、今年の初茜の天を眺めながら改めてその思いを強く心に畳み込んだ。

オズボーンの怒りを込めて振り返れ、とは関係ない。しかし、あの戯曲の最後のくだりなどは、ある意味小生の思う怒りを持って振り返らなければ涙する感動は生まれなしい、に通ずるものがあるように思う。

私は、感動とは未来だとか夢に通ずるものだと認識している。涙する感動と言うのは未来への希望が見えなければ、予感できなければ感じる事が出来ないものだろうと思う。そして、希望と言うのはある意味で現状の破壊、型破りがないと見えてくるものではないと思う。今を、現在をまるまる受け入れ、振り返る事がなければ明日への希望は望めないといえる。

これまで何回か書いてきたが、私は昔は良かったという言葉が大嫌いである。そして、その言葉を口にする奴らは自分が現在に何も創造する物

を持ってなかった奴らなのだ、と思っている。少なくとも自分の知恵を使って何かを創造した者達は、その創造が何の役にも立たなかったとしても、決して昔の方が良かったとは言わない筈である。

昔が良かったというのは、先人の知恵をしゃぶることしかできなかった者達である。いかな優れた先人の知恵たりとも、ただただしゃぶっていたら唯のカスになってしまう。味の無いカスとなった先人の知恵を見て、昔は甘かった、と言うのである。そんな奴らに涙の出るほどの感動を覚える事など出来ないのだ。

昔とは、過ぎた時とは、言わば縁でもないものなのだ。だから過ぎた昔は怒りを持って振り返ってやらなければ、希望の光は見えてこないのだ。本気になって、大きな怒りをもって振り返らなければ、感動する夢を紡ぐことは出来ない。

一年の計は元日にありと言うので、今年も本気に怒りを持って振り返りながら、涙する感激を得たい、と念ずる次第である。

『初茜の風に』

風には流れがあります
水にも流れがあります

流れる風には景があります

流れる水にも景があります

流れる景には声があります

風の呼ぶ声がきこえます

水の呼ぶ声もきこえます

そして

あなたを呼ぶ

私の声が流れています

謹賀新年

ふるさと風の会会員募集中

ふるさと風の会では、「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談&勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

深層心理 (2)

菅原茂美

人は、意識する・しないにかかわらず、昔の経験が、いつまでも後を引く。良きにつけ、悪しきにつけ、後の心に関わりを持つ。深層心理は、しぶとく、まとわりつく。

それが嬉しいことなら、思い出しても心がふつから温もるが、逆に、命の危険にまで及ぶ恐怖の体験なら、トラウマ(精神的外傷)として、心の大きな傷となる。何万年も後まで、個体を超え、世代を超え、種族の深層心理として付きまとう。

「いじめ」現象など、人間だけではなく、他の動物にも日常見られる。豚など観ていると、近年の飼いは、不断給餌と言いつても無制限・食べ放題システム。すると、群れの中の強い者は、序列の低い者がエサを食べようとすると、自分は動けないほど満腹なのに、下のものの採食を邪魔する。習慣的に意地悪をする。乳牛などもスタンション(Ⅱ頸枷・くびかせ)で一列横隊に繋がれており、餌槽(しそう)へ一斉にエサをやると、強い者は、首や舌を伸ばせるだけ伸ばして、まず両隣のエサを先に食べる。そして自分の分け前はゆつくり後で食べる。悲しいかな、これが生き物の本性なのかもしれない。

人間社会も、これと似たりよったり。自由競争とか言うが、要領良く、他を押しつけて、先に「利」を得た者のみが、生き残る。正に弱肉強食で、野生動物となんら変わらない。「利発」と言えばカッコイイが、策略をめぐらし、裏技を使い、先んずれば人を制す。利己主義こそ生き物の本性なのか? 野生時代から培われた競争原理。これが歴然として現代にも生き、深層心理として強く

関わる。人類は万物の霊長などと、自惚れるが、醜い勝者など、讃える気にはならない。

* * * * *

さて、今から700万年前、アフリカ東部のサバンナで、大型類人猿の一種が、直立二足歩行を開始した。これぞ、正に我々人類の発祥である。

樹から下りて、あまり敏捷でもない人類の祖先は、肉食獣の格好の餌食であつたに違いない。しばらくは逃げ回るだけで、対抗手段もなく、勿論、攻撃の道具も、身を守る智慧もなかなか発達はしなかつた筈。猛獣と飢餓との両攻めで、戦々恐々の毎日であつたと思われる。

それから長い年月をかけ、狩猟の道具を進化させ、言葉を使うようになり、それなりの工夫を重ねながら、効率的な狩猟採集の遊走生活が続く。猛獣から逃れる手段も徐々に工夫され、獲物は仲間同士平等に分け合つて、極めて平穏な集団生活が営まれた事であろう。原人は旧人へと進化し、20万年前ついに我々の直接祖先となる新人(ホモ・サピエンス)へと進化していった。

そして新人は今から7万年前、住みなれたアフリカを後にし、数百人の黒人の集団(これが現在の全人類の祖先)が、アラビア半島へと進出。それから後は、「遙かなる旅路」を重ね、緯度の高い地域に進出した者は、メラニン色素が減少し、世界の隅々まで人類は拡散していった。肌の色の違いで差別するなど狭量も甚だしい。元を糺せば、全人類は、みな親戚のようなもの。

ところが、今から一万年前、長かつた狩猟採集の遊走生活に区切りをつけ、メソポタミアあたりで、日々の罨(ねぐら)を一か所に定め、原始的な農耕生活が始まつた。栽培しやすい植物を育て、

おとなしい動物を飼ひ馴らして家畜とした。

衣食住が確保されたそれ以降は、人類は人口を増やし、大きな集落を作り、農村→都市へと発展していった。すると人類は自然を支配し、強大な構築物を建設し、偉大な芸術や哲学・そして宇宙の神秘にまで迫る科学の塔を打ち立て、自惚れ過ぎだが、万物の霊長として君臨する。

都市など人口が密集してくると、当然、それを纏め、取り仕切り、我こそは「王」なりとして覇を唱える者が現れる。すると平等で穏やかだつた集団に、財力や権力に「格差」を生じ、搾取する側と、される側が生じてくる。ここに人類の「争い」の原点が生じ、その規模は拡大していく。それゆえ、今、道徳や倫理観に貫かれた品格の高い社会を構築しようとしても、それまでの社会習慣など身についた習わしが頭をもたげ、高潔な社会規範が乱れていく。いつの世も、自然発生的に生じた「格差」が、争いの源となる。

【樹から降りたサルは、サバンナを移動する時、地球の引力に逆らつて直立二足歩行を始めた。すると因果応報というか、多くの肉体的異変が生じてきた。まず4本足に体重が平等にかかつていたものが2本になつたので、負担は倍となる。従つて膝関節炎など、苦痛を招く結果となつた。

次は腰。上半身の全体重を負担しなければならぬ。細い腰回りにそれほど強力な筋肉はない。おそらく殆どの人が腰痛に悩まされるハメとなつた。同じことは首周囲についても言える。重い頭を、あの細い首で支えるのは負担が大きい。人類の7個の頸椎は、重い頭部を支えるために、軟骨はすり減り、ギシギシ言う。頸椎症だ。肩こり、首痛のない人は殆どおるまい。

そして忌まわしきは痔疾。4足なら肛門部に鬱血する事はあまりない。心臓と肛門部は地面に対し平行だからだ。しかし直立すれば、肛門部の血液を心臓まで引き上げるのは負担が重い。心臓のポンプ機能が低下すれば鬱血し痔疾となる。更に立ちくらみや脳貧血・胃下垂など、地球の引力に逆らった罰は、かなり大きい。】

* * * * *

なぜ人類から争いがなくならないか。「進化の系統樹」の同じ枝に、つい最近まで人類と一緒にいたゴリラは、実に平穏な動物である。我々サル族をよくよく観察すると、樹上生活するサルは、「縄張り」を強く主張すると言われる。越境者は血みどろの制裁を受ける。しかし、平原に降りたサルは、比較的縄張り主張が少ないという。見通しが効くので、遠目にも相手を早期に確認でき、衝突を避けることができる。又、樹上生活ならイチジクなど果実で水分補給が確保されるが、平原では熱射が強く、水分補給は水飲み場へ行かなければならない。しかし水飲み場は、ライオンなど猛獣が常に待ち伏せる所。この水溜りは、オレの縄張り：などとは言つていられない。グラダヒヒなど、群れが違つても、水飲みを交代で、争うことなく済ますという。共通の強敵がいれば、仲間同士で争うことは少ない。ヌウとシマウマは同じ場所ですべて草を食べるが、決して争わない。シマウマは耳が良く、ヌウは目が良いので、互いに早めに敵を発見でき、共存関係にあるのだという。

* * * * *

さて、同じ類人猿のゴリラが、あんなにも優しく、平和な生活をしているのに、チンパンジーと人類は、何故こんなにも好戦的で、争いが絶え

ないのか？

先ずチンパンジーは、樹上生活が主体なので、果物などが実る樹木は、縄張りの中に、どの木は、いつ実が熟するか：など、しっかりと脳裏に刷り込まれている。それを他の群れに侵略されれば、生存にかかわる重大問題である。命をかけて闘うほかない。しかし、チンパンジーから更に進化した「ボノボ」(「ピグミーチンパンジー」)は、人類が最後に枝分かれした、高度に頭脳進化した類人猿だが、実に平和的で、縄張りはあるが、群れが突然出合つても、決して争いにはならないという。互いに群れの中からメスを出し合つて、相手のボスを慰め合い、何事もなかったかのように、別れていくという。見事な「猿智慧」である。

これに対し、最も知能の発達した人類は、あまりにも縄張り意識が強く、排他的で、容易に他と和合することなく、争いが絶えない。(宗教対立など度量が狭すぎる。)しかも、トコトン相手を打ちのめすまで、攻撃の手を緩めない。一体なぜこのように進化したのであろうか？

人類の祖先は、アフリカのサバンナで進化をとげ、常に天敵や飢餓との戦いであり、樹から下りたサルなど、肉食獣にとつて、格好の餌食。そんな環境では、仲間同士が縄張り争いや、個体間の闘争にうつつをぬかす暇など到底なかった。共同で狩りをし、メスや子供が待っている巣に持ち帰り、平等に分け合つて仲間意識を強固なものに発展していった。そのような狩猟採集の遊走生活をしていくうちに、温和な平和的な動物であった。

ところが、「定住生活」が始まり、原始的な農業が始まると、気候変動等で、食糧が不足する事態がしばしば起き、人類はそれに備え食糧の「備蓄」

を始めた。備蓄があれば、少々の不作や人口増加にも対応ができ、当初は非常にうまく機能した。

ところが、その備蓄は、集落により差異が生じたり、或いは強欲なものが、不平等に抱え込んだり、争いの元となった。それまでの、分け合つて平和に暮らしていた人類は、備蓄がもとで貧富の差が生じ、背に腹は代えられず、略奪など、好戦的な状態へと進展していった。

【昔、私は実に不愉快な後味の悪い本を読んだ事がある。そこに書かれていたことは、『援助すると、後で憎まれる：』。これはどういうことか？人は自分が苦しい時に恵んでもらつたその時は、大変ありがたく感謝感激であるが、日が経ち、自分もある程度余力が付いてくると、昔の恩はサラリと忘れ、『あいつ、金持ちのくせに、オレにたつたこれだけしか呉れなかった。ケチクソ！』と悪口を叩く。特に遺産相続など肉親関係では、醜い関係に発展する。兄弟は他人の始まりともいうが、人類は道徳面など高度に進化した気高い生物：などと考える方が、そもそも間違いらしい。

日本は戦争賠償の意味もあつたと思うが、かつて韓国や中国に「円借款」など、どれほど莫大な援助をしたことか。今、両国の反日活動は目を覆いたくなる始末である。実力が付いてくると、昔、羨望の目で見ていた対象を「ライバル視」し、徹底的にコキ落とす。先哲の孔孟思想はどこへ行つたのか？ 国家としての「品格」はどうでもよいのか？ 人間の浅ましさを！】

さて、高等な類人猿で、樹上生活をするチンパンジーは縄張り主張が激しく、好戦的な動物となつたが、樹上から降りたゴリラと人類は、平和な動物となつた。ゴリラ(完全草食性)は、あの顔

に似合わず、極めて柔和な動物だと言われる。人類も直立二足歩行を始めた頃は、環境の厳しさに、仲間同士助け合う、温和な動物であったらしい。しかし人類は道具の発明などで知能が進むと、埒に定着し効率的に食糧が確保され、その「備蓄」を始めた。人類を救うための備蓄がかえって、それが基で奪い合いが始まる。地区単位の集落、この縄張り意識が高まると、今日に見られるような、好戦的な見苦しい生き物へと変化していった。

集落↓部族↓国家↓国連…と組織は成長・拡大して行っても、基本はエゴイストの個人が集団の基礎。高次の機関が争いを食い止めようとしても、決して纏まりはつかない。国家間の争いなど、高次の機関が機能し、有無を言わず、きっぱりと裁定できないものか。

イスラエルとパレスチナとの睨み合いは、互いにロケット砲などぶち込み、民間人まで死傷者が多数出る。すると、国連などが仲裁に入り、一時的に和平が成立するが、数年たつと、また元に戻り戦闘をぶり返す。人間の「業病」とでもいうのか、譲れないものに固着する。

闘争・略奪・戦争など人類が背負わされた「負」の遺産は、真に重く、人類は知恵を絞って、哲学や宗教など、いかほど道を説いても、一向に改善の兆しは見られない。社会構造が生んだ「格差」こそ、争いの元。欲の深い者は隙あらば奪い盗る。深層心理として、根強く根幹に染み着いている。

* * * * *

一方、宇宙飛行士など、天空からこの惑星を眺めたら、国境線を挟んで罵り合う人類を見ると、よくよく情けなくなると思う。彼等は利口だから、そんなことは口にしませんが、人類は宇宙に飛び立

つほど文明が進化しても、人間の本性というか、永遠に争いが絶えない現実をみると、よくよく情けなくなることである。

【ある夜、私は夢をみた。人類がいかほど知恵を絞っても、これまで地上から争いが絶えることはない。そこで世界中から、ノーベル生理学医学賞受賞の科学者10人ほどを集め、全生物に共通して存在する「利己的な遺伝子」を、起動しないように抑え込むタンパク質を生産する遺伝子を、人工的に創り、何らかのウイルスに組み込んで、地球上全域に空からバラ撒く。ウイルスは全ての生物の細胞に潜り込み、強欲な生存機能を徹底的に抑え込む。そうすると、生物の生存の基本は、競争原理ではなく、協調原理が支配するようになる。動物も植物も、栄養を分け合って平和的に生きていく。人類も、ゴリラのような高レベルの道德社会を見習い、シルババック（ゴリラの親分）の指揮下に入る。すると、強欲な人間活動による自然破壊や資源の枯渇はなくなり、他の種を絶滅に追い遣る犯罪行為もなくなる。地球の未来に光がさして来る…。そこまで見たら、目が覚めた。】

* * * * *

深層心理が強く作用する典型は、「故郷を恋うる心」であろう。なぜ生まれ故郷にこんなにも心が引かれるのか？ それはおそろく、自分を安全に育ててくれた所、即ち、母の慈愛に満ちた最も安全な所…と、知らず知らずのうちに強く認識するからであろう。（幼馴染や初恋の人などが健在ならなおさら）。鮭が、自分が安全に育った故郷の川に回帰するのも同じ原理。それゆえ有袋類の育児嚢と同様、母の子袋の中ほど、安全な所はないはずで、子袋の延長線が故郷なのである。

「渡る世間は鬼ばかり…」とか、「男子敷居を跨げば七人の敵あり…」とか言われるが、親離れした子供にとって、世間の荒波は真にきつい。それゆえに安全な母の懐に飛び込みたくなるのは当然の心理。望郷の深層心理は、母の子袋に戻りたい…そこに本能的起源があると思う。

野生の動物など、親離れの後、生き残れるのは半分にも満たない。逆にいえば全てが生き残ったから、数が増え過ぎ、食べ物が不足し、種の保存ができなくなる。人類は生存の智慧が進化し、子供の生存率が向上したため、現在世界人口は爆発し、その人口を養うには、地球が1個必要と言われる。人類が万物の霊長などと言われたのなら、種の永続保存システムを開発した後でなければ、大口を叩いてはいけない。それも出来ないで、人口増加が続くのは、無能な生物の暴走と同じ事。

日本の縄文時代の人口は10万人と言われる。縄文人の遺骨は4千体も発掘されているが、戦闘などによる骨の傷は一体も見つからない。逆にすぐその後の弥生人（大陸からの難民等）は、首をはねられたり、手足を折られた骨は無数に見えられている。それゆえ、人類が平和に暮らす為の理想人口は、現状の千分の一ぐらいが最適と考える。それゆえ、世界人口は100万人。日本12万人。そしてこの石岡市は80人。20人ぐらいの家族単位なら、4家族のみ。正に平和の楽園だ。これなら衝突も、ケンカもしようもあるまい。人口過剰こそ、人類の争いの根源と考える。

【私のパソコンは、すごい高性能。「衆議院」とキーを打つと、「衆愚院」とすぐ変換する。】

側高神社

木村 進

利根川に沿って千葉県側を走る国道356号線（利根水郷ライン）を佐原（香取市）から銚子に向かって5kmほど進んだところに「側高神社」の大きな看板がある。成田線の線路際に一際目立つ大きな看板である。場所は東関東自動車道の佐原パーキングエリアに近い。

仕事で銚子に用事があり、この看板の前を車で何度か通過した。

側高神社？いったいなんと読むのだろうかとなつて調べた。「そばたかじんじや」というそうだ。そして、先日やつとこの神社を訪問することができた。

神社の入口に「神武天皇十八年御創建 国土淨化の祖神（みおやがみ）」と書かれた大きな看板が置かれていた。神武天皇十八年は紀元前となつては、近くはそのまま解釈はできない。しかしこれは、近くの香取神宮の創建と同じである。この神社について調べてみると実に興味深い神社であることがわかった。

興味深いのは名前もさることながらその祭神が長い間秘匿とされており、不明ともいわれていたということだ。

今では祭神は、「側高大神」「産土神」などといわれ、この神社は香取神宮の第一摂社だとされる。この「ソバタカ」と読む神社には他には「側鷹」「脇鷹」「蘇羽鷹」「素羽鷹」「隣高」「相馬高」「祖波鷹」「蕎高」という名の神社が調べただけで十九箇所見つかった。

都道府県別では千葉県十四ヶ所、茨城県二ヶ所、埼玉県二ヶ所と千葉県に集中している。その他の

県には見つからない。また千葉県も昔の下総国の領域であり、茨城や千葉もすべて下総と近い場所にある。

説明と資料として残しておくために、その一覧をここに掲載しておきたい。

（千葉県）

- ・側高神社：千葉県香取市大倉5
- ・側高神社：千葉県成田市取香276
- ・側高神社：千葉県香取郡多古町本三倉
- ・側高神社：千葉県香取市丁子567
- ・蘇羽鷹神社：千葉県松戸市二ツ木宮前
- ・蘇羽鷹神社：千葉県印西市笠神697
- ・脇鷹神社：千葉県成田市小泉1015
- ・脇鷹神社：千葉県旭市清和甲904
- ・脇鷹神社：千葉県香取市伊地山568
- ・稲荷側鷹合神社：千葉県香取市西部田857
- ・素羽鷹神社：千葉県印旛郡栄町酒直585
- ・隣高神社：千葉県山武郡芝山町下吹入421
- ・相馬高神社：千葉県山武郡芝山町上吹入353
- ・祖波鷹神社：千葉県香取市岩部1064

（茨城県）

- ・側鷹神社：茨城県行方市小高（旧麻生町）
 - ・側高神社：茨城県稲敷郡河内町金江津4272
 - ・脇鷹神社：茨城県稲敷市飯出（広畑貝塚の隣）
- （埼玉県）
- ・蕎高神社：埼玉県吉川市高富（たかどみ）
 - ・蕎高神社：埼玉県吉川市高久（たかひさ）

この一つ一つを足で歩いて調べてみたい衝動に駆られたが、実際に見に行ったのは数ヶ所のみだ。ここでは、調べた内容をいくつかを紹介するのみに留めておきたい。そして、時間がある時にまた

のんびりと訪れてみるのも良さそうである。

一、香取市大倉の側高神社。

香取神宮の東北（丑寅）方向にあり、香取郡と海上郡との境界に建つ。香取神宮の鬼門（東北）に置かれた神社と思われる。創建は香取神宮と同じ神武天皇十八年とされ、その他の「そばたか神社」の総本社と思われる。九州肥後の多氏が上総に上陸し、開拓した氏族、または前からこの地に住む氏族かは不明である。この神社には次のような話が残されている。

「側高神が香取神の命で陸奥の馬二千疋を捕らえて霞ヶ浦の浮島まで帰ってきたところ、陸奥の神が追跡してきたため側高神は浦を干潮にして馬を下総に渡らせ、次いで満潮にして陸奥神が渡れぬようにした。」

また鎌倉時代から始まったとする五穀豊穡を願って当番の引継ぎの際、酒を飲み合う時に、カイゼル髭を撫でる「ひげなで祭」が今も行われている。

二、成田市取香（とっこう）の側高神社。

成田空港の敷地に隣接し、高速道路脇に建つ。江戸時代から続く県の無形民俗文化財に指定された能楽「三番叟」が四月の花見時期に行われていることで知られる。これも稲作文化の五穀豊穡を願う祭りである。このトッコウ（取香）という変わった名前については、香取を逆さまにしたもので、古来から住んでいた部族が、後からやってきた香取神（物部・経津主（ふつぬし））に侵略されたことに対する抵

抗の表れという説がある。成田空港建設時に神社が移転し、祭りも一時途絶えたが復活されたという。

三、茨城県行方市小高の側鷹神社。

常陸風土記の行方郡に「行方郡男高里に栗家池があつて、その北に香取神子の社がある」と書かれているが、この香取神子の社がこの小高側鷹神社のとされている。

社伝によると、経津主大神がこの小高に東征したときに、大祖高皇産靈尊（国産の神）を祀り、石槌の剣を捧げて戦勝を祈ったのがこの社の始まりだと伝えられる。

この石槌の剣はこの側鷹神社の御神宝となつている。香取神宮からみると霞ヶ浦を渡った北北西であり、浮島の対岸に位置している。この社が北東（丑寅）の鬼門に建てられた神社と考えると、近くの皇徳寺の裏山に皇徳寺古墳群が見つかつており、ここに下総の部族の一部が住んでいたと考えることも出来るであろう。

四、印旛郡栄町酒直（安食）の素羽鷹神社。

この神社の近くにある「龍角寺」（創建：和銅二年（七〇九））に伝わる話では「昔、印旛沼の龍が天に昇つて雨を降らせ、その後、龍の体が三つに分かれて天から降つた。その頭の部分が落ちたところに龍角寺を建て、この龍の頭を祀った。」といわれている。また腹と尾が落ちたところにそれぞれ「龍腹寺」「龍尾寺」がある。この酒直の素羽鷹神社については詳しいことが分からないが、創られた年代も、

この龍角寺とほぼ同じ頃でつながりも深いと考えられる。

五、松戸市二ツ木宮前の蘇羽鷹神社。

この神社の建つていたところには千葉孝胤が治めた三ヶ月馬橋城が建つていた。千葉氏は居城である亥鼻城（いのはなじょう）、（現千葉市役所近く）の鬼門（東北方向）に曾場鷹神を祀つていたという。そして、その後佐倉に移る際に、この馬橋城が廢城となり、そこに蘇羽鷹神社が建てられたと伝えられている。または太田道灌との争いに敗れ、落城したが、その後千葉宗家によりこの神社が建てられたともいう。

六、埼玉県吉川市の二つの蕎高神社。

埼玉県にあるが、この吉川市は昔、武蔵国二郷半領吉川村と呼ばれ戸張氏が領有していた時期があつた。戸張氏は千葉氏の系列である相馬一族で、相馬師常の八男（行常）が葛飾郡戸張郷（柏市戸張）を領して戸張氏となつた。居館（戸張城）は柏トンネル付近にあつたとされるが、この吉川に「そばたか神」を祀つたものと考えられる。この二つの神社ではそれぞれ一月にあられをぶつけ合う「オビシヤ」という五穀豊穰を願う祭りが残されている。

「そばたか」と呼ばれる神社を六つほど見てきたが、これらの神社に共通して見えてきた点を述べると次のようなことが挙げられる。

（一）祭神としては、そばたか大神を祀るが、この神は下総に経津主がやってくる前にすでに

土着していた部族が崇拝していた神と思われる。

（二）経津主（香取大神）と協力して日本の国創りをした。これは高皇産靈尊（国産神）と重なる。

（三）千葉氏およびその氏族である相馬氏が密かにこの神を祀つて、鬼門（丑寅）を守る神とした。千葉氏は桓武平氏良文流とされるが、この祭神を密かに奉つているのは多氏や蘇我氏の系列や天日鷲命を祀るところもあるので阿波忌部氏などとの関係も考えられる。

古代においては鬼門は忌み嫌う方向ではなく、神のくる方向であり、最も運氣の強い神を祀つたものと考えられる。

（四）五穀豊穰を奉る神であり、稲作、雨乞いの神となつた。

（五）神話における日本の国創りにおいて、表に出せずに隠す事情があつた。

これらのどこに真実があるかは筆者には解き明かす力は無い。しかし、いつか事実が明らかになる日は来ると思う。

最後に常陸風土記の信太郡のところに書かれている一節を載せておきたいと思ひます。

「諺に、葦原の鹿の味は、腐つてあるやうだ」といふ。山の鹿の肉とは味が違ふ。だから下総との国境の狩人たちにも、獲り尽くされることはあるまい。」

ここでいう葦原というのは常陸国の信太郡あたりを指していると解釈されます。また、日本神話では「葦原中国（あしはらのなかつくに）」とは、高天原と黄泉の国の間にある日本の国土のこととされています。

さあ、今も下総の国と、利根川を挟んだ対岸にある信太郡（稲敷市、美浦村など）では常世の国の穏やかな風が吹いています。

今年は災害もない良い年であることを願っています。

巳の年の初めに

兼平ちえこ

『福 住みついて 巳の年に』

ちえこ

二〇一三年 明けましておめでとうございます。皆様にはお健やかに幸多き新春をお迎えになられた事とお喜び申し上げます。

昨年中は当「ふるさと風」をご愛読頂き、ご指導ご支援下さいまして誠に有難うございました。

今年もどうぞ宜しくご愛顧のほどお願い致します。今年の干支のへびは余り人々に好まれておりませんがその中の白へびに関しては古くから神様の使いとされ、その皮を身に着けていると福が舞い込むと言われて、「巳年はお金に困らない」と言われてきました。今年こそ巳年にちなんで新内閣のもと経済再生と震災復興の道へと導いてもらい、スムーズに事が運ばれることを切望してやみませぬ。それには国民皆さんの公にお任せでなく、何

事も出来る事から、そして工夫しながらの気迫と行動が大きな力となる事と思います。今年も拙い文章で特に旧石岡地区を中心に歴史や伝統等などお伝えして行きたいと思えます。

当会報、昨年の十一月（七十八号）より、石岡のおまつりで華やかさを誇る山車の人形についてお伝えしていますが来月号から引き続き、地区の皆さんとの触れ合いを楽しみながらお伝えして参ります。

幕末の志士、天狗党員の宿舎であった紀州屋の養女として女将を引き継いだ大久保たか様に六歳頃まで子守りや面倒をみて頂いたと云う金丸町の大高様、そして香丸町の年番について、文書を作成しているかくしゃくとして九十二歳の中島様。お三人（中島様の奥様の満面の笑みと優しくご丁寧な説明を頂き心豊かになりました。その節は本当に有難うございました。どうぞ市民の皆さん、今年の石岡のおまつりにはその地区の人形のエピソードを頭に思い浮かべながらご堪能頂ければ嬉しく思います。

石岡在住二十三年目の私は街内の諸催事には機会を逃がし参加、見学したことが少ないです。そんな中から、昨年経験してみても二件程感動がありました。

一件目は十一月四日（日）午後一時より第四十五回石岡市文化祭についての石岡囃子発表会でした。まだ九月の石岡のおまつりの余韻が残されているままに石岡市民会館大ホールに着席。土橋獅子舞連、若松はやし連、常陸はやし連（大小路町）、金丸はやし連、国分はやし連、染谷はやし連、三村はやし連、香丸はやし連、守横はやし連、青屋はやし連（高浜地区）と市内十地区で石岡囃子連合保存

会のみなさんでした。会場は三歳、五歳位のお子様が多く、小学生も加わって、出演者のご家族でしようか、賑やかになりました。舞台のバックには大きな松の木が描かれた垂れ幕が下がり、格調高い雰囲気です。

最初に土橋獅子舞連、昇殿の舞いから始まり、太鼓、鉦、笛が奏され、おかめ、キツネ、ひよつとこの順におまつりの山車での踊りとは違う感覚とばかりに上品に、勇壮に、滑稽に舞台狭しと舞い踊る。

そして驚いたことに舞台真下の客席あたりで、三歳、五歳位の子供さん達が一緒に踊り出す。その中でも目を引く五歳位の男の子、おかめ、ひよつとこの踊りには集中して見つめキツネの踊りになると途端に一緒に踊りだす。お見事です。確実に次代に引き継がれていることに大感激でした。

二件目は十二月七日に行われた、三世代芸能発表会・作品展でこちらは私も参加者の一人となりました。孫・子・祖父母三世代の日頃の歌や踊りの練習成果の発表会でした。この催しは、一昨年は震災で、その前の年はインフルエンザの猛威で中止に至りました。

久しぶりの可愛い元気な幼稚園生のお遊戯とお遊戯終了後には一同正座して「おじいちゃん、おばあちゃん風邪にきおつけて元気で過ごして下さい」のご挨拶に目を細め、コーラス、民謡、ダンス、カラオケなど色とりどりの衣装にも感嘆の声をあげながら三時間余り過ぎ最後の舞踊、石岡市民音頭に釘づけとなる。私にとつて幻のメロディを聞く事が出来そして踊りを見る事が出来ました。感激でした。

それは今から四年前当会報第二十一号（二〇〇八

年(月)に「ご存知ですか」と題して石岡市民音頭の歌詞と石岡市民の歌が存在している事を知り、それを紹介しました。その当時市役所で尋ねましたがメロディーも踊りもとうとうわからず仕舞いでした。「当時はよく公民館へ習いに行つたもんだ」と客席近くの現在七十年代半ば位の方が云つてましたが市民の皆さん踊つておられた時期があつたのでしょうか。

歴史の里いしおかを讃え、郷土を慈しんだ石岡市民音頭は息づいていました。今一度市民の皆さんに親しまれるよう、踊りの普及は街おこしの一環になるにちがいありません。「出かけなければ、出会えない」参加する事、歴史を知る事を楽しみながら心がけることも街おこしに一役買うことになると思います。

うつりかわり

伊東弓子

今年も十日足らずで暮れていく。「早かったね」「あつという間だったね」「又年を取るね」等の話しをし合うにつけ、何か怪しい思いがする。でも時を止める事は出来ない。時の移りいく中にある私も老いへと変わっているのだと肯定しようとしている矢先、老いの中にも新たな発見のある事に気がついた。

それは御留川での争いが絶えなかった事を、風“ 77号に書いた後、あの争いの張本人、丸水の船が出て来た園部川を遡るべき出かけた時だった。

小川尻と川中子の間を河口として園部川は流れて来ている。老田川と呼ばれていた時がある。

今の大井戸が大枝の津という港であつた事からそこに流れる流れをそう呼んだとか。川の源流が八郷、園部地区なのでそうだと。小川園部城から付いたなどの話しを耳にした。川は川中子の地にあり、小川境は小川側堤防の下となつている。東側堤防上と川中子新川岸に水神が祭られている。今でこそ堤防のお蔭で水嵩が増しても直線に近い流れは心配ないが、以前は九十九折と呼ばれ曲がり曲がっていたそうだ。絵図・地図にも描かれていぬ内(東)東(北)にかけてその名残

がある。何軒かのお宅の裏側が、あるお宅の一部が、畑が、田が、子供達の遊び場などが、川の一部だったようだ。これも旧流れの一部かと思われ、辺りの水門をみて北へと向かう。廃線となつた鹿島鉄道銚田線のガード辺りから小川町に入る。国道355に架かる「園部新橋」の下を流れ北へと流れていく。旧園部川は小川、川中子境の水門から岡地に入っていた。細い流れとなつて篠藪に覆われてしまつている。カーブしながら鳶を拂い除ける事も出来ず、陽を見る事も叶わず、水音を声にする事も出来ないのか、此処にあの大きな流れがあつたなどもう誰も忘れてしまつたろう。ましてやこれからの人が尋ねてくれる事もないだろう。消えていく運命だろう。橋向公民館、生活排水濁水浄化水路、町営駐車場は旧園部川の上にコンクリートの蓋をして出来た物だ。微かに水の音が聞こえるが丸水の旗を掲げ意気揚々と出ていったお船頭達の川岸はもう影も形もない。

小川地区図書館二階には川岸の賑わいの様子が紹介されている。川岸も6、7軒あつたが姿は消えた。アパートに形を変えて存在感を残した所もあるが、殆んどは分からない。最後残つていた菊

池川岸は震災で傾き、今年更地になつた。橋向側の山のように薪の積まれた所はあき地が多い。蔵は農協が使用した後、野菜売り場となつている。商店は日用品、衣類店、大衆食堂、蕎麦屋、スナック、電気屋が頑張つている。この間まであつた「髪結屋」の看板は姿を消した。私が子供の頃「くじゃく」という飲み屋があつて華やかな服のお姉さんが出入りしていた。小川三町に入る二つの橋も埋されて地図にもない、形もない。

川岸から橋本旅館の前を通つて旧県道(府中街道、往還道)が始まる。旅館の前を園部川が流れ、隣りの設計事務所の間を流れて行つた。其処は小川、中延、栗又四ヶの境だ。

橋本旅館から橋向を見ると、真直ぐな道がある。それは鹿島鉄道の常陸小川駅が出来る時に造つたもので道の両側に家が出来ていった町であつた。昭和四十年の頃知り合いから聞いてより深く分かつた。「川中子の地主宅へ地代を拂いに行くんだ」という事だった。この辺一帯はその地主の土地で皆なかなか買えないので、借りているという訳で、暮に地代を拂いに行く事になつていったそうだ。土地代までは聞かなかつた。「大変なんだよ」と言つていた。その人達も確り此の地に根づいて生活している。町の外れに今の園部川の橋が見える。田木谷、上玉里へと続く道だ。

この文の始めに「新たな発見をした」というのは、設計事務所から石材店へと差し掛かつた時だった。道沿いに家並みが続く所、一軒崩れかけていたのは記憶しているが、その両脇も取り壊されていた。結局目に入った空間は三軒の何倍もの広さを感じられたのだ。とても不思議だった。その奥が実に広く見えるのだった。その先にあつたお

かめ納豆霞ヶ浦工場やザ・マルヘイの大きな建物がなくなつた所為でもあるかと思つたが、いや違ふ今の園部川の堤防も、右にある主要地方道玉里・水戸線が走つていても、その奥に左右に走る国道355線が横切つていても関係ない。一丁田と呼ばれていたこの地域、娘の頃見たあの景色が甦つてきた。今此処から見る広い田と取手山、それに連なる峰に改めて感動し、新たな発見をした。取手山は帰りがけにゆつくり一回りするとして園部川に別れを告げることにした。

園部川は設計事務所協から小川横町公民館と横町公園の間を細い水路となつて流れ百貨店の店と大竹住宅の間をいき、主要地方道小川鉾田線を土の中で横切つていく。そしてスガイモーターの前から、今の園部川へ水門を通つて合流するのだ。丁度水門辺りに橋桁があつて府中街道と合流し香取神社の坂を上つて行つたものだ。一〇八曲がりと言われたという話もあった。この先の流れも直線が多いが昔は曲つていたのだらうと思ふ。四ヶ村の七十才の男の人は「子供の頃は真直ぐだったよ」と言っていたが以前の事は知らない様子だ。

昭和の始め、園部川の工事と百里飛行場の工事は同じ頃だつたと聞く。玉里地域の男達も日雇い人夫として働いたそう。百里の工事の方が賃金が高いので朝早く出かけても人気があつたという。二十年前になるが、大雨の後小井戸のカーブが氾濫したことがある。大嵐の水が勢いよく流れてきたからだろう。自然の流れに逆らつて造つた結果だろう。水は富田、中延の田を管めつくし、橋向辺りは床上浸水だつた。自然との共存は難しい事なのだと思ひながら、現在の園部川の園部橋を渡

つた。袂から常陸小川駅が見える。此処も発見の一つだ。駅一棟がなくなつた先が広く見える。橋向からずっと続いて広い広い水辺が目に見え、豊かな水田が続く様が見えるようだ。玉里の八館の一つ取手山を一周した。波寄せる中に浮かぶ小島、実りの風の中にこの山が佇む姿は、高く聳える小川城から眼下に見下ろせた。あの戦いは簡単には勝敗のつくものでなかつた。二百人が眠つていてもいわれている。その他巻添いに合つた犠牲者は千人といわれ西の方に千人塚がある。静かに眠つている人達を揺り起こすような事が起きた。この山の一部を切り落とし人間のための道を造りだした。そんなに人間は何故勢ぐのだらう。待つのももどかしい、曲つた道は面倒だ。と欲望は切がない。それが発展か。これが移り変わりなのか、これもうつり、かわりなのだと喜びより虚しくなる。

この山を削るにあつて発掘が行われ始めた。もしかしたら私の心も移り変わらうとしている。何が出てくるのだらうか。戦いで倒れた二百人の姿が現われるかなと、新たな思いが湧いてくるのだつた。馬の嘶き、走る蹄の音、迷惑う人々の声が聞えてくるようだ。崩れた館も、天を染めた炎も、水辺に流れた血の色もすべて時の流れの中に消えていった。結局忘れられてしまう。今の自分の見える範囲でしか物が見えなくなる。だから自己中心になり主張するだけになる。

ちよつと以前の人達の姿や表情を知つてあげません。ちよつと向こう側にあつた物を捜してみませんか。ちよつと以前の昔に耳を傾けてみませんか。大きく呼吸して少し前の空気を吸ってみませんか。子供の時の、若い時故郷の事ぐらひは確

あけましておめでとうございます。

ギター文化館では今年も魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

2013 CONCERT SERIES

- 1月27日 新春コンサート クラリネットとハーブの調べ
- 2月 3日 パプロ・マルケス ギターリサイタル
- 2月24日 ティボー・コーヴァン ギターリサイタル
- 3月24日 長野文憲 ギターリサイタル
- 4月 8日 里山と風の音コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

り見ておくこと、聞いておくことが大切なんだとこの年になって思うようになった。時が移つて形がかわつても前の記憶が思い出される。そしてそれ以前のことで見えてくるようになる。年令と共に感じ方や見方も変わっていく中で自分そのものが楽しくなる。移り変っていくことは豊かになることだと信じてたい。

でも幼い日、若い日にスピードだけを追つて、目を置くものも耳を傾けるものも気づかずに毎日を過ごしていたらどうなるだらう。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（4・2）

小田原城を落とした秀吉の心は既に東北地方に向いているから、どうでも良い関東地方などは尻尾を振ってきた者に「すきなようにせよ」と言ったのであろう。常陸国は、それでなくても征服欲の強い佐竹氏が命令を聞いたからたまらない。食べ放題の店に入った大食いタレントのように手当たり次第に喰い尽くした。大塚氏など世情に疎い田舎の武士団は、無駄に将来を考えている間に政府の命令で攻め滅ぼされたようなものである。

東北地方の場合も基本的には同じ構図であり、津軽、南部、伊達、最上などの有力大名が情報源となつて中小武士団の「対・秀吉対応」が決められたのだと思われる。ただし、お互いが競争相手であるから、全幅の信頼を置くという訳にはいかない。最終的に決めるのは自分たちである。ここでも運不運が大きく作用するので、大雑把に言えば青森、秋田、山形地方の武士団は、独自の判断か又は秀吉・家康共に信頼を受けている最上氏に頼ったからか、いずれにしても不安を抱きながら小田原参りをして領地を安堵されている。

これに反し岩手、宮城、福島に居た武将たちは情報源を伊達政宗に頼った……と言うよりも、この三県は伊達政宗を代表にしなければならぬほど政宗の活躍？が大きかったのである。情報源の政宗さえも領地五十万石を罰金に取られるほどギリギリで滑り込みをしたのであるから、金魚のウ○○のように後に続く連中が、ホームベースを踏め

る訳が無い。アンパイヤの怖い顔は目の前にしても宣告は「アウト」以外になかった。

その一でも触れたが、最上氏と伊達氏は親類中の親類で同族に近い。情報を交換して対応すれば東北地方が一本化されて無難に終わるところのだが戦国時代のこと、下等動物より激しい喰い合い潰し合いをしていたために、日本海側と太平洋側とは強権（狂犬）病にかかった秀吉への対応が異なり、悲劇を生んだのである。

しかしながら犬に例えれば、訓練の行き届いた犬でも理由も無く餌を取られれば牙をむく。事情が呑み込めずにいる間に領地を没収された現地の中小武士団が黙っている筈がないのである。伊達政宗の意見に従って「慎重な態度」を取り、小田原行きが出来なかった（其の為に領地を没収された）中小武士団を改めて拾い出してみると九戸、稗貫、大崎、和賀、葛西、石川、白河、岩瀬、安積、本庄などなどの諸氏になるので、これらの武士団は遠く平安時代、鎌倉時代から奥州に赴任し土着した豪族の子孫であり、秀吉のように「一発屋」で成り上がり武士になった家系では無い。

豊臣秀吉が北条氏政を降伏させて小田原城に入城したのは天正十八年（一五九〇）年の七月十三日である。同日付けで北条氏の領地であった名目だけの関八州が徳川家康に与えられた。父祖の地を取られ見ず知らずの関東へ、それも大きな代償を払っての転封であるから腹の中は煮えくりかえっていたが、家康は何事も無かったように移動を済ませ八月一日には江戸城（と言っても粗末な小城であった）の窓から東京湾の景色を眺めていた。その頃には秀吉も奥州へ向かっており八月十日には伊達政宗の先導で会津に到着していた。秀吉は会津城

の天守閣から周囲を見渡して「ここは良い所だ……と褒めてから、政宗に米沢城へ移るよう命じ、会津には蒲生氏郷を置いて家康と米沢の伊達を監視する役目を与えた。

天正十八年八月十日、この国土を自分のものと錯覚した豊臣秀吉は「奥州仕置 おうしゅうしおき」と称して「総検地」を命じた。それまで各地の小名や豪族たちが先祖伝来で保有して来た土地は全て「蔵入地」として名目上は秀吉の掌握下に置かれ検地の対象とされた。それを、秀吉が勝手に決めた計画に基づいて「恩給」と言う形で再配分したのである。検地は秀吉が任命した諸大名の手で強制的に行われた。その際に総指揮官に任命された豊臣秀次が秀吉の命令として強引な政策を非情なまでに遂行し、多くの人々を虐殺していった。昭和二十年の敗戦で日本に進駐したアメリカ軍でさえも「皆殺し」の命令など出さず、子供たちにはチョコレートやチューインガムを呉れていた。戦国時代の末期に居た狂気の権力者によって日本の歴史は拭い難い傷がついた。

関東・東北地方に悲劇を齎した「秀吉の遠征」が一段落して侵略軍の主力が引き揚げた九月に入ると、守備隊の手薄を狙った反乱が東北地方の各地に起こった。一方的な侵略に対する防衛行動であるから、これを「反乱」とするには忍びないものがあり言い替えれば従来の支配権を侵されたことへの抗議であろう。先ず十月の中旬に反乱の火の手が上がったのは「葛西、大崎領の一揆」で、そこには秀吉が任命した統治能力の無い新領主の存在があったことは既に述べた。この事件で伊達政宗は「関与」を疑われ自ら残酷な討伐をさせられた上に、領地を米沢から宮城県北部に移された

のであるが、その場所が反乱の発生地である。

これは権力に屈した政宗の反乱者撫で斬りで解決したが、続いて「和賀・稗貫の一揆」が起こり、出羽国でも「仙北、庄内、由利」などでも騒動が起こる。これらの一揆は葛西・大崎領の反乱と示し合せた行動とされているが、いずれも小田原へ行かなかつたという理由だけで領地を没収された中小武士団の領内で起きた事件である。その後被害者の恨みがあることは当然であるが、侵略者が権力に任せて過酷な年貢の取り立てや検地で農民を苦境に追い込んだことが直接的な原因になっている。無道な圧政を行えば何処でも反発は起きている。東北地方全体が豊臣政権を拒否していたことが推測される。

天正十八年の冬になると南部領内に「九戸政実（くのへまさね）の乱」が勃発する。これは南部支族による分離独立運動のような要素もあるけれども、豊臣秀吉の理不尽な支配に対する東北の民の怒りを象徴した抵抗運動であり、反骨精神の証しとも言うべき出来事であるらしく、武士だけでなく農民を巻き込んだ大騒動に発展した。九戸城に籠る五千余の群衆に対して、秀吉は呆れるほどの大軍を派遣した。総大将が豊臣秀次と徳川家康、軍監（源頼朝時代の梶原景時のような目付け役）が浅野長政、従軍軍勢が蒲生氏郷、伊達政宗、佐竹義宣、石田光成、大谷吉継、上杉景勝らの諸將に、地元の中小武士団、さらに豊臣・徳川の臣下である武將たちも動員されたと記録されているから大規模な合戦並みの編成である。兵力からして当然と言えば当然であるが九戸城は約一か月で落され、ほとん全員が殺害されたという。勿論、その一揆に加わっていた農民、婦女子でもある。

押さえ付ける側からすれば反発や抵抗の内容などはどうでも良いのであり、文句を言う者は許されない。何しろ小田原まで行かなかつただけで賊として追放された時代である。九戸氏は南部系だが支族なので小田原行き義務は無かつたと思われけれども秀吉の命令で多くの城が壊されたから実質的な被害も受けていた。被害の内容云々ではなく、無謀とも思える九戸政実の反乱は東北地方の人々が抱く反骨精神の現れと見る論が多い。けれども何の権限もなく侵略する奴が一番悪い。なお南部氏は「その一」で述べたように源頼朝の遺児と称する千鶴丸を同行して奥州へ赴任した甲斐源氏の南部三郎光行を祖とする一族である。

あるテレビの「大坂夏の陣の再現ドラマ」で、タレントと称する連中があれこれと批評する番組があり、強引に攻める徳川家康を「悪」で、果敢に応戦する豊臣方の淀君を被害者でけなげな女性のように口を揃えて言っていたけれども、これは権力争いであるから両方とも悪である。むしろ、東北地方に攻め込んで殺戮を繰り返した秀吉の因果が、共に栄耀栄華を極め人民を苦しめた淀君に崇つたと思ふべきであろう。そして淀君が護ろうとした遺児の秀頼は、実は秀吉の子では無く側近の大野治長か石田三成の子とする説が有力なようであるから、それが事実ならば淀君は秀吉という悪の権化を手玉に取った凄惨な悪女になる。

解釈をサーブスすれば淀君は父親（浅井長政と母親（お市）の方の仇である秀吉に変則的な復讐をしたのである）：歴史が難しくなるけれども：個人的な恨みもさることながら、権力を握った者は多かれ少なかれ一般民衆を犠牲にしている。歴史は飽く迄も勝者の栄光の記録であり、その陰にあ

る弱者の悲劇は後世に伝わり難い。本来は弱者の涙を語り継ぐ歴史があるべきなのだが：話を単純な形に戻すと、豊臣秀吉による強引で無慈悲な奥州支配に対して、幾つかの抵抗運動が起こった結果、その全てが世界大戦に匹敵するような馬鹿げた軍事力に依って鎮圧されてしまい、婦女子を含む多数の人々が殺害されてしまった。そして東北地方に起こったそれら一連の事件の背後にはなぜか鎮圧軍の一員である菅の伊達政宗先生の指導の影がちらついていたのである。

織田信長やら重臣たちに「猿」と呼ばれながら押し上がり自分が天下人になったと思ひ込んでいる秀吉は、平氏でも源氏でも歴史上の先覚者を商売下手な同業者ぐらいいにか見ていない。奥州に累代の清和源氏を称した和賀又次郎義忠も例外では無く同族と共に小田原へ行かず岩手県北上市近辺の領地（推定・数万石）を没収されてしまった。

この義忠は武將に似合わず名前に「陸奥守」とか「常陸介」など、権威づけの官名を付けていないと思つたのだが、現地の有力大名で徳川家康の代に関ヶ原の合戦に於ける対応で失敗した小野寺氏の盛衰記には「和賀薩摩守」を称していたと書いてある。どちらにしても飾りであるからどうでも良いのだが、薩摩芋が育たないと言われる東北地方に居て薩摩守は素直に考えて不似合いである。敗者の情報であるから不確実ながら、その義忠の居た北上市地方には、秀吉の命を受けた浅野長吉が来て領地を没収し領内の城を壊したという。義忠はこれに抗議して、妻子を秋田地方へ逃がしてから居城の二子城（北上城）に籠り抵抗の姿勢を示した。話の都合で説明が後になるが、秋田の仙北地方には和賀氏の分流が居たので、それを頼つ

たのである。義忠主従らは、その一で紹介した下岩崎城を含めて抵抗を続け、攻めてきた大敵を防いで良く戦ったが抗しきれず、自分も城を捨てて秋田へ行く途中で殺害された…と伝えられる。

是により自称「清和源氏の後裔」は消えたことになるのだが、小野寺氏の盛衰記は「疑わしい」と記録している。つまり殺害されたのでは無く、何処かに隠れていたらしい。何処に隠れていたのか：隠れると言っても、秀吉が派遣した軍勢が占領地である東北地方には田圃の蝗(いなご)ほど居たらしいから、深い山中に潜むぐらいいしか行き場はない。勿論、追う側の軍勢は入る山には入り込んで調べた。正確に言うと、入りたく無くても命令で山中を搜索させられたから、顔や手足が傷だらけになった。それでも見つからない。反乱首謀者の首が無くては手柄にならないし、搜索責任者の勤務評定にも影響し、悪くすれば処罰されるかも知れない。そこで適当な戦死者の首を拝借し「首謀者・和賀義忠」と名札を付けて本部に送り一件落着を図った。首謀者が退治されれば派遣軍は引き揚げる。敵も味方も「万歳」を叫んだ。

落城の前に和賀義忠の妻子が落ち伸びていったとされる仙北地方の分流は、当然だが搜索隊に真っ先に疑われ「関係者を隠していないか！」文書で厳しい追及を受けている。しかし和賀地方から仙北へ抜けるには千メートル級の山々が連なる奥羽山脈を越えねばならないから誰も現地調査はせず「当地方に逃げ込んだ賊は居らず、また合戦で疲れた身で山を越えることは不可能です」とする回答文書を信用したのだと思われる。実際には此の時に山越えをして仙北地方の和賀系武将に匿われた武士がかなり居たものと推定される。この場

合は堂々となつた「嘘」が大勢の命を救った。和賀の遺臣に頼られた武將は「本堂」を称し、源氏三代から北条氏に天下が移った「承久の乱」の前後に和賀本流から分かれて奥羽山脈を越え、出羽国仙北地方に進出した一族である。源頼朝の遺児・千鶴丸であると名乗った和賀忠頼の子は忠明と言う。忠明の第三子が忠朝で、頼朝から名前を貰ったかどうか知らないが、どうせ三男坊では本流に頭が上がらない、此処は一つ異郷に新天地を開こうと、兄から付けて貰った僅かの家臣を連れて奥羽山脈を越えた。着いた場所が現在は「真木真昼県立自然公園」になっている秋田県東部中央部にある山麓の田園地帯である。

地図を見ると一目瞭然なのだが、古代から秋田地方に至る交通の障壁となっていた奥羽山脈を越えると田沢湖近辺から湯沢近郊まで、いわゆる雄物川流域の沖積平野が開ける。かつて坂上田村麻呂らが奥羽地方侵略の拠点にした払田柵(ほったのさく)が置かれていた辺りの土地は、後三年の役以降に奥州藤原氏が押さえ、其の後は鎌倉武士の和田義盛が領有していたと推定されるけれども山向こうに居た和賀忠朝が出しやばって来た西暦一三〇〇年代始め頃の領主は誰だか分からない。多分、その頃に鎌倉で起きた「和田合戦」頼朝死後の北条氏と有力武將との勢力争いで義盛が潰された後に正式な領主が決まっていなかった？

苦勞をして山向こうから仙北平野に辿り着いた和賀忠朝は、真昼山麓に開けた広大な土地に無断で入り込んだけれども特に妨害もされず、其の地に強引に居座ることにした。丁度、良い具合に、かつては蝦夷の砦があったと伝えられる小山があったので、其処を居城とすることにして勝手に山

城を造り、近辺の農民たちを集めて「領主宣言」をした。その時期を西暦一二二〇年とする説と西暦一三五〇年以降とする説がある。察するところ最初に出来たのが一二〇〇年代で、以後は周辺武士団に攻められ、逃げ出したり戻ったりして、ようやく城主として安定したのが足利尊氏の時代ということになるのであるうか。この山城跡は史跡として現在でも残されている。

山城と言っても東西が約六百メートル、南北には最も長い部分で百六十メートル程の頂上が平らな標高百七、八十メートルの台地である。山麓高地にあるから、高さは手長猿なら届くような感じの小山で本格的に攻められると長持ちはないと思うが和賀忠朝とその子孫は其処に三百六十年間も頑張っていて勢力を伸ばし見掛けは悪くても一国一城の領主として鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代を生き抜いてきたようである。謂れは不明だが、その山城が築かれた場所、つまり蝦夷館の跡は「本堂」と呼ばれていたらしく、和賀氏を改めて「本堂氏」を称した。

どうでも良いことだが、話に信憑性を持たせるために触れておくと和賀(本堂)忠朝の後は安房守・親景―伊勢守・親光―式部丞・忠義―少輔太郎・義次―伊勢守・義胤(室町幕府の内乱に際して勲功あり)―義章―義通―伊勢守・久通(秋田氏と合戦)―義安―伊勢守・義房(近隣の大名と連合して合戦に参加)―伊勢守・義親(合戦で討死)―頼親(合戦で討死)―能登守・朝親(合戦で討死)…多分、傍線を付した城主の代に三百年以上を過ごした山城から平野部の城に移ったものと推定される。「伊勢守」を称した者が多いのは城の形が海老(蝦)に似ていることと関係はない。

次の領主が本堂忠親であり、やはり伊勢守を称した。奥羽地方のリーダーである最上氏から情報を買ひ、天正十八年三月に小田原まで出向いて豊臣秀吉に領地を安堵された。最盛期には二万石とも五万石とも言われていた本堂氏であるから仮払いでも何でも万石単位を認定されても良いと思うのだが「地元の史料」では九千石弱になっている。石岡の大掾氏と同じで落ち目になった時点での禄高で査定されたのか、或いは逆説した本流との関係で減額されたのかは分からない。

既に秀吉が死んで徳川家康の時代になりつつあった慶長四年には、秀吉に潰された筈の和賀氏本流で後継者問題が起こった。よく考えれば滅亡した家であるから当主は存続しない筈であるのに、そういう問題が起こるといふことは誰かが庇っていたことになり、秀吉や家康の目を誤魔化して其れだけのが出来る人物となると伊達政宗ぐらししか居ないことになる。この場合、反乱を起こして隠れていた義忠か、或いはその子と思われる秀親という人物が死亡したようで、一応は名門の名跡を継ぐ当主であり領地は無くても自称・清和源氏の家系として存続していたものらしく後継者問題が浮上して来たらしい。

どうせ眉唾な源氏であるから捨てておいても良さそうなものだが、名門同好会が中心になって「和賀氏の家系が絶える」ことで対応を協議し後継者を選ぶことになった。家系相続には二つの説があって先ず和賀分流の本堂氏に伝わるAの説では「奥羽山脈を越えて出羽の国に進出していた本堂氏から後継者を迎えた」とされる。また和賀氏に伝わるBの説では「豊臣秀吉の厳しい追及を逃れた和賀義忠の弟が継いだ」ことになっている。追

及を逃れられた手段としては伊達政宗の庇護しか考えられない。ややこしいことに、どちらの説でも対象人物が「忠親」と言う名である。

A説に依れば時の流れで豊臣秀吉や徳川家康に仕えながら苦勞をして本堂氏を守って来た忠親が没落して名前だけの和賀氏を継ぐのは不自然さがあり、B説のほうが妥当性はあるように思える。ところが、B説だと伊達政宗の「裏の功績」がバレてしまうことになる。同時に、本堂氏が和賀の残党を匿っていた事実も明らかになる。これを防ぐために本堂氏がA説を残したものと思われる。血液型ではないが、AでもBでも良いのであるけれども、実はこの和賀氏を相続した人物が、時節はずれで一騒動を起こすのである。

上杉景勝を牽制するため東国に来ていた徳川家康が、伏見城の異変により関ヶ原合戦の開幕を予想して江戸城を出発したのは慶長五年（一六〇〇）九月一日とされる。その七日程前に家康は家臣を使わして伊達政宗を奥州に留めるように「百万石の手形」をチラつかせたのである。政宗は二心の無いことを誓った。伊達と最上が、石田三成に近い上杉景勝の動きを封じていれば、家康は後顧の憂い無く石田三成と対決できる。政宗は忠実にその任務を果たした。上杉は動かず、徳川家康は関ヶ原合戦で勝利することが出来た。

これで終われば平和の為には喜ばしいことなのだが、怪しい行動を身上とする伊達政宗にしては何か物足りなさが残る。そこで、ご要望に応えるようにして或る事件が起こり、政宗の関与が疑われることになる。しかし、この事件は風聞として伝わるけれども記録が少ない。現代でも大物政治家の臭い噂は権力構造に依って消臭剤が多量に撒

かれるけれども、伊達政宗が「芳香剤」を買ひ占めた話は聞かないから遠慮勝ちに言うしかない。

徳川家康が伏見城（島原元忠）からの知らせによって東北行きを中止し、江戸城に戻ってから関ヶ原へ出発したのは慶長五年（一六〇〇）九月一日とされている。その一週間ほど前に、先に述べた「百万石の夢」が伊達政宗に内示されたようである。普通の人物ならば宝くじよりも遥かに確率の高い夢に賭けるのだが、元々は百万石を持っていた政宗であるから「もう一段上」を狙つたらしく、家康から頼まれた仕事はキツチリとこなしながら、万が一にも東軍敗北、家康の没落ということになった場合の保険にも入ることにした。

実際に「石田三成が集めた軍勢により徳川家康が討たれた」という噂が広がって、上杉景勝を抑えるために出陣中の南部藩の軍勢が逃げ帰る騒動が東北地方で起こっている。伊達政宗の深読みも見当外れではなかったのである。自分が殺されたことになるとは予想しなかった家康は最上義光、南部利直、伊達政宗らに上杉景勝を牽制させることにより、石田三成側の東国勢力を封じた上で安心して関ヶ原へ向かっていった。

上杉景勝は豊臣秀吉に会津百二十万石を与えられていたから、その恩顧で西側に付く可能性が高く、また徳川家康とは同格の大名であったため家康の下に就くことを快しとしない。上杉の家老には切れる者の直江山城守が居て、これが三十万石を貰って米沢に居る。この主従が秀吉の死後に領地へ引き籠り冬眠中の熊のようにしているから家康は気になって仕方が無かったのである。

南部、最上、伊達の三軍に監視されて動きが取れない上杉勢は、無駄に軍備を増強しただけで大

人しくしていた。ところが、監視団の南部領内で予想外の人物が騒動を起こしたのである。南部領内は豊臣秀吉の非情な制圧で多くの武士団が潰されておち、退治されたとは言っても、その残党がかなり潜伏していた。南部勢の主力が上杉監視団として出動し、国許が手薄になった機会を狙い二千人ほどの反乱軍が決起した。多分、関ヶ原合戦で東軍が勝利した頃と推定される。インターネッツも手渡し時代の代りであるから「家康死亡」のデマが時間遅れで伝わったのかも知れない。

デマに惑わされたのかどうか定かではないが、潰された大名の家臣であった者たちが、先に家紋のことで紹介した北上川沿岸の岩崎城に立て籠り「和賀主馬亮忠親」を首領として氣勢を上げた。冷静に考えると、時代が変わって徳川家康の天下になろうとしている時期であるから、豊臣秀吉に潰された恨みを爆発させるにしても見当違いや的外れになりかねない。ドサクサに紛れた挙兵だとしても一揆が「誰に、何を、どうして貰いたい」のか分からない。首領に担ぎ出された和賀忠親は没落した和賀家の再興が望みであったことが推定できるけれども、全員の希望では無い。それでも起こったのが南部領内であるから取り合えず南部藩の軍勢が「？」を兜に付けて鎮庄に向かった。ところが、この勢力が意外に強くて半年ほど抵抗してから慶長六年の春によく攻略されたのである。南部藩兵が捕らえてみると、その中に伊達領の者が大勢含まれていて、鉄砲隊で活躍したり武器や食糧などを運び込んだりしていたことが窺えた。そして首謀者と目された和賀主馬らの姿が無い。この一揆がしぶとく頑張っていられたのは伊達政宗の援助があったからではないか…その

様に睨んだ南部信濃守利直は公式文書を以て伊達政宗に厳重な抗議をした。

これに対して政宗は、現代の政治家の模範になるように「知りません。存じません。覚えが有りません。記憶に有りません。関係有りません…」とする文書を南部藩に送っている。それも現代人には真似の出来ないような堂々たる文面で、どちらが被疑者か分からないような強い口調である。抜け目の無い政宗は自分の城である岩出山(古川市西北)から援助したのではなく、水沢に居た配下の土豪・白石宗直に支援をさせたようなので、足がつかず、また万一、発覚した場合でも「秘書が勝手にやったこと」にできる。四百年も前に伊達政宗が採用した方法が現代の政界に活用されていることを思えば、国会議事堂の玄関前には伊達政宗の銅像を建てるべきである。

ところが無責任な返事に怒った南部藩は徳川家康に出す報告書に「伊達政宗の関与」を付記したらしい。そのうちに南部領内で政宗が本場に知らない一揆が発生した。そこで政宗は討伐の軍勢を派遣して百五、六十人の敵を打ち果たし、それを堂々と家康に報告したと言う。さすがの家康も「スリの親分から財布が届いた」ようなもので、これに取り合わなかったと藩史に記録されている。

【風の談話室】

時の移ろいとは、振り返ると実に早く過ぎるものかと驚かされます。

何もやっていない者には、もう一年が過ぎたのかと思つし、何かを必死になってやっている者にと

つては「嘘だろつ。もう一年だなんて」と思つものである。

だが同じ一年の長さなら、走り続ける一年方が良い。折角生きているのだから。生きていることを実感できる一年の方が良いに決まっている。

【ヨイシヨ広場】(陸平をヨイシヨする会)

心を映し出す鏡

田島早苗

辰年も押し詰まった大忙しの二十六日、縄文土器部会の仲間四人は暢気そうに「北茨城の復興支援ツアー」のバスに乗り込んでいた。

野口雨情生家／資料館・記念館・天心記念五浦美術館などを見学して、最後は那珂湊お魚市場でお買い物という魅力ある企画に負けて山積み

の年末家事を放りだし、後ろめたさを隠しながらはしゃいでいる私だった。修復中の雨情生家には入れなかったが、資料館の中で、お孫さんが愛情と情熱を込めて語って下さった祖父の思い出を聞くうちに、童謡の作詞家として漠然と描いていた雨情像とは違う教育者としての信念を貫き通した姿が浮かんできた。童謡は児童の精神生活を指導し、彼等をして一個の人格者にまで円満に生育せしむる力となるものなればなりません「子供が童謡によって培われる心の園は、やがて大人になってから咲く、彼等の花のためであります」等々その数多い著書に記された言葉の重みを現代の教育者に今一度噛み締め直してもらいたいと思うことしきり。

太平洋戦争で敗色が濃くなってきた日本軍が、

最後の賭けとして風船爆弾を飛ばした事は知っていたが、その基地の一つが茨城県大津町に有ったことは初耳だった。大槻地には十八個の放球台があり、昭和十九年十一月〜二十年四月までの間に約九千三百個を放流、約千個がアメリカ合衆国、カナダ、アラスカ、メキシコなどに届いたが、戦局を左右するさせるほどの効果は無かったという。ただし、オレゴン州で、不発弾が爆発して、ピクニック中の市民六名（大人二人、十〜十四才の子供五人）が犠牲になったとか。

復興成った那珂湊お魚市場は年末らしい賑わいが戻っていたが、震災前の混みようには及ばないようだった。「復興支援、復興支援」と眩きながら財布の紐を緩めっぱなしの年の暮れだった。

さて大晦日の夜、何時も二人つきりで静かな我が家に孫子が集い、総勢十二人と二匹の犬までが仲間入りして賑やかな年越しになった。

私が幼い頃の年末は、大掃除から餅つき、おせち料理、注連飾り迄それぞれ手順と分担が決まっていた、わくわくしながらお手伝いしたのを覚えている。真っ白な割烹着に姉さんかぶりの母がやけにまぶしく誇らしかった。普段は家事をしたこともない父が八面六臂の大活躍するのも嬉しく、家族の絆が一段と深まる年末年始が大好きだった。父が押し餅を切り終え、おせち料理も準備万端整った大晦日の夜、山のように鯉節を削るのは毎年の最後の役目だった。鯉節を削る一年の最後の音が小気味よかった。

除夜の鐘が始まると母は子供三人の財布を縫い始める。百八の鐘が鳴っている間に縫い終わると、一年間幸せに暮らせるのだという。除夜の鐘が鳴り終わると、同時に父は若水を汲み、神棚と仏壇

に供えて、灯明を灯し新年の祈りを捧げる。父の打つ大きな柏手が夜の静寂を破り部屋一杯に響き、身の引き締まる思いがしたものだ。テレビもなかったあの頃、良い夢を見ようと枕を叩いてすぐに寝入ってしまった。元日の朝は家族全員がそろって、新年の挨拶を交わし、父の削った削り鯉をたっぷり掛けた小松菜のお雑煮と、おせちの祝い膳を囲む。平和で心温まる新年の行事を、戦争が始まるまで繰り返していた。

さて、辰年から巳年へ十二人と二匹の年の瀬は、年越し蕎麦を食べながら、去年今年の余韻に浸る間もない年越しだった。テレビや携帯が主流となつてしまった日常、時代はめまぐるしく動いている。

珍しく穏やかに晴れた元旦、全員そろって土浦市の八坂神社へ初詣に出かけた。長い行列に並び、正月風景を楽しみながらのろのろと進む。福だるま等の縁起物には人影もまばら、経済復興が果たして成るのだろうか？

今年こそ脱皮した日本が見られますように。

飛躍の年

柏木久美子

新春をお慶び申し上げます。昨年は舞台を見ていただきありがとうございます。本年もよろしく願いいたします。

ここ何年前から「日本組曲」をやりたいと騒いでいたら、ヒロ爺が取り上げてくれて昨年6月にギター文化館で踊ることができました。この時は

「漁師の歌」と「桜の木の下」の2曲を使用して編曲してもらい踊りました。そして今年10月に「日本組曲」完全版を両国・シアターXカインにて上演することが決まりました。これは12月に共演したクラリネット奏者の橋爪夫妻のご紹介で、12月28日にシアターXカインの芸術監督の上田美佐子氏と面談して決まったことです。

上田氏はレパートリー劇場を企画するなど「良いものを残す」「伝える」活動をしていたらいいものですので伊藤道郎は兄弟も含めてもつと取り上げられても良いと思うとおっしゃってくださいました。こうした言葉は私にとって力強い励ましのことばです。

踊りの世界だけでなく「古い」ということで捨てられ、忘れ去られることのなんと多いことか。「伝えることの大切さ」を伝え続けたいという願いは増々強くなりました。

「新しい」ということで飛びついたものの、危険をまざまざと教えてくれた原発…これも東日本大震災の津波の被害だけではない恐ろしい実情があります。12月に飾ったタペストリーは私が教えている生徒の作品でしたが、自分のできることで伝える活動ということで「ちくちく着物プロジェクト」を継続応援します。

美浦村の仲間と東海村村上村長を招いての講演会を企画していますが、そこでも「ちくちく」のタペストリーを飾ります。志を同じくする仲間を増やしながらの活動を今年も精一杯やりたいと思います。どうぞ皆さん見に来てくださいね。

【「とぎ座だより」】

嬉しい年二

小林幸枝

明けましておめでとう、ございます。
今年もよろしくお願いいたします。

一年もあと三日で終り、と思った日、白井先生から東京公演が決まりましたと連絡を頂いた。
今年の十月二十三日から二十五日の三日間、両国のシアターXカイという劇場での公演となります。ホルストが伊藤道郎のために作曲したと言われている「日本組曲」を主題とした将門伝説荳蔻姫物語を上演することになります。大先輩の方達との共演もあるとのことなので今からわくわくしています。

最近、私の公演を見た友人たちから、万葉集などに興味を持って、いろいろ見ているという話をされました。また日本の歴史にも大きな興味を持つようになったとかで、良くメールで話すようになりました。私の舞台を見て日本の短歌や歴史などに興味を持っていただき大変うれしく思っています。

今年も頑張って、ふるさと物語を演じていきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

やっと第一歩を…

白井啓治

小林幸枝の手話に、舞台表現のスケール感を見出し、手話による表現を軸にした朗読舞を創案し、ことば座を設立して今年で7年になる。ギター文化館の協力を得て、当館発として「常世の国の恋

物語百」を発信してきたのであったが、漸く発信基地からの第一歩を踏み出し、東京での公演が決まった。

当初は、舞台公演など全く縁のなかった小林幸枝を連れて二人だけの出発であったが、舞台の背景画に兼平ちえこさんの参加を貰い、次いでオカリナ奏者の野口喜広さん夫妻との共演、ギター文化館専任講師でギタリストの大島直さんとの共演、そして現代舞踊の柏木久美子さんの参加をいただき、漸く劇団としての形を成してきたのであった。

昨年、柏木さんよりホルストが伊藤道郎のために作曲した日本組曲の事を知り、早速その試演を6月に行ってみた。そして、これならばオーケストラをバックにした本格的舞台にかけることが可能と自信を深め、その実現に歩き始めたのであった。

一つの確りとした題材が現われると、その題材の有する潜在力が次々に人の繋がりを産み、話しがとんとん拍子に運び、年末に両国のシアターXカイでの公演が決まったのであった。

柏木さんとの共演で、伊藤道郎を身近におくことが出来、そこから日本組曲の話が現われ、その音楽を担当してくれる人を考える中で、かつての弟子であった橋爪・塩見夫妻との再会が始まり、さらに弟子の塩見君の繋がりで伊藤道郎とヨネヤママコさんとの関係を知る事となり、ママコさんには東京公演での協力を頂けることにもなった。

この日本組曲を主題とする将門伝説荳蔻姫物語を企画することで、これまで忘れていた多くの人の繋がりが新たに始まると共に、直接にはつながりのなかった人たちとの間に、へーそうだったのですか、という不思議な縁を発見したりと、一つ

の確かな題材の有している潜在力というもの、今更の如く知らされた。

苦節7年といえば格好が良いが、そうではなく好きなこと、やりたい事をやっていたの7年が正解である。その7年で漸く最初に描いていたことへの第一歩を踏み出すこととなった。

さてさて、今年は大層に忙しい一年になりそうである。

当ふるさと風の会は、5月でまる7年となる。振り返れば、そう遙々遠くまでやってきたものだと思う。だが、当風の会は振り返って懐かしんだり、感傷に耽ったりしてはいけない。

自らの来し方を振り返る時は矢張り「怒りを込めて振り返れ」であるべきだろうと思う。

明日の希望を思うのであれば、過去は懐かしく振り返るのではだめで、本気の怒りを持って振り返る事が必要なのであると思う。

寂れ行く町には懐れ合いを捨てなければ希望は生まれてこない。

希望は望むものではなく創るものだから、本当の怒りを持って振り返り、既成を突き破る力を、型破りをする力を身に着ける事だろう。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>